

# 『マハーバーラタ』における矢 —— nārāca (「鉄の矢」) について ——

文学研究科インド哲学仏教学専攻博士後期課程3年

伊藤 頼人

## はじめに

『マハーバーラタ』の戦争に登場する武器は、剣、槍、棍棒、斧、空想と思われる神秘的な武器など多岐に渡るが、最も重要なものは弓矢である<sup>1</sup>。矢には多種多様な名称が与えられており、その中には名称の違いによって明確に区別することが難しいものも存在する。

本論文では『マハーバーラタ』における戦闘で使われるnārācaという名前で呼ばれる矢に着目し、その特徴を論じる。MWでは、nārācaは“an arrow of iron”と説明されており、本論文ではnārācaの鉄としての性質を示すような点について注意を払う。その方法として、nārācaの用例を抽出し、nārācaと同時に用いられる動詞や形容詞、比喩表現などを検討する。

『マハーバーラタ』は人間の創作した物語であるから、物語内で述べられていることがそのまま現実の戦争の形や、実際の戦場に立つ者たちの間で共有されていた価値観とすべて一致しているとは限らない。また、それを明らかにするのが本論文の目的ではない。本論文は『マハーバーラタ』の作者が、物語内における戦争がどのような形で行われていたのか、また、戦争に関する描写の中で現れる、戦争時に規定される価値観をどのように認識していたのか、その一端を理解する点において助けとなるものである。

## 1. 矢について

『マハーバーラタ』において、頻繁に用いられる矢を表す単語はśaraであり、śaraには葦という意味もある。同じく多く用いられる矢を表す単語bāṇaにも同様に、葦の意味がある。矢は葦を素材として作られたと考えられている<sup>2</sup>。また、KauṭīliyaのArthaśāstraでは、目的に応じて矢の先端が鉄、骨、木材で作られているとの言及があるが<sup>3</sup>、[Hopkins 1889: 275]は叙事詩では骨の矢は滅多に見られないと述べる。

矢を表す単語はśara, bāṇa以外にも iṣu, sāyaka (またはśāyaka), śalya, bhalla, kāṇḍa, vipāṭha, pṛṣatka, khaga, mārgaṇa, kalamba, kṣurapra, śilīmukhaなど、多数存在する。

矢を表すすべての単語に明確な違いがあるのか不明な点、言い換えに過ぎない単語も存在する可能性もある。しかし、それぞれが別の種類の矢として認識されていることが分かる一節もある。以下は、戦争の最中にビーマが自分の戦車の御者に対して、残っている矢の数を確認する場面である。

viṣoka uvāca,  
ṣaṅ mārgaṇānām ayutāni vīra kṣurās ca bhallaś ca tathāyutākhyāḥ,  
nārācānām dve sahasre tu vīra trīṇy eva ca pradarāṇām ca pārtha. (MBh.8.54.15)

ヴィショーカー（＝ビーマの御者）は言った。

勇士（＝ビーマ）よ、6万本のmārgaṇaと、それから合計1万本のkṣuraと、bhalla、一方、勇士よ、2000本のnārācaと、まさに3000本のpradara [がある]、パールタ（＝ビーマ）よ。

鎌の形状を表す単語は、三日月型 (ardhacandra<sup>4</sup>)、猪の耳型 (varāhakarṇa) 子牛の齒型 (vatsadanta) など、いくつかの種類が存在する。

また、不正とされる矢も存在する。以下は、ビーシュマがユディシュティラに対して、王としての教訓を語る場面。

neṣur lipto na karṇi syād asatām etad āyudham,  
jayārtham eva yoddhavyaṃ na krudhyed ajighāmsataḥ. (MBh.12.96.11)

毒が塗られたiṣu, karṇin (= 逆刺のある矢) は存在すべきでない<sup>5</sup>、これは不正な者たちの武器である。征服のためだけに戦うべきである。殺そうと欲していない者たちに怒るべきでない。

これ以外にも、針 (sūcī)、腐った矢 (pūti)、曲がりくねった矢 (jihmaga) など不正な武器と認識する記述が見られる<sup>6</sup>。それに続いて、真っ直ぐの武器は公正なものと描写される<sup>7</sup>。

逆刺のある矢や針のような武器、腐った矢、曲がりくねった矢などは撃たれた者の体内から取り除き難く、取り除く場合にも傷を深くしやすい点が共通する。毒に関しては、矢そのものとは異なる症状による痛みを与える。[Hopkins 1889: 281] は上記の武器群に対して「不正である」と規定する観念は、『マヌ法典』や叙事詩の後期の時代において作られたものであると述べる。また、これらの武器は、「不正である」と規定されるよりも古代から用いられていたが、時代が降るにつれて「残酷である」と認識されたために批判されるようになったと述べる。[上杉 2004: 49] によると、考古学の調査で『マハーバーラタ』の作られた時代以前の地層から発掘された鎌の中に、逆刺を有する物が存在していることが示されてい

る。

## 2. 『マハーバーラタ』におけるnārācaの概要

葦の矢とは区別され得る矢として、nārācaがある。MWでは、nārācaは“an arrow of iron”と示される。複数の先行研究<sup>8</sup>でも鉄の矢であると述べられている<sup>9</sup>。

『マハーバーラタ』において、nārācaは約200箇所を確認出来る。nārācaを扱う主体は、物語に登場する強力な戦士たちである。nārācaを用いて射る対象は、敵対する戦士が最も多く、次いで象が多く見られる。それ以外にも、御者、馬、戦車、飛んでくる敵の武器、集合的に敵の軍隊などが標的にされる。

nārācaが使用される際の数、数を特定しない複数で表されることが多く、それ以外にも数を特定した複数、数百 (śataśaḥ)、数千 (sahasraśaḥ)、多数 (bahu)、単数など様々に表されている。

nārācaとともに、√han, √tud (殺す、打つ), √pat (落とす), √iṣ, √kṣip, √muc (射る、飛ばす、放つ), √vyadh, √bhid, √chid (貫く、裂く、切る) などの動詞が使われる。相手の堅い鎧や象の身体を切ったり、裂いたり、貫いたりするためには、矢がそれなりに強い素材である必要がある。このような動詞の描写からも、それが可能になる素材である鉄の鋭い刃を持つ矢の性能が想定されていると考えられる。

## 3. 鉄の使用について

インドの考古学研究においては、紀元後5世紀頃に現在の形に至ったとされる『マハーバーラタ』が作られた時代には、現実の世界において既に鉄の武器が作られていたと考えられている。

[上杉 2004: 39] の示す「北インド都市文化編年表」によると、紀元前1000年前後には鉄器が導入され始めていたとされる。[同: 41-43] では、ガンジス平原西半部 (ガンジス川中上流域) の複数の遺跡から発掘された鉄器について述べている。それによると、早いところでは紀元前500年頃の地層から、鍬、刀子、槍先、斧などの武器、あるいは武器の一部や、武器以外の工具や農具などの鉄器が発掘されたことが述べられている。

また、[Dube 2008: 27-28] も複数の遺跡から鉄の鍬が発見された例を挙げている。それによると、たとえばAtranjīkherāの発掘遺跡の紀元前1200から紀元前600年に該当する地層から、鉄の鍬が発見されたことが示される。また、同じ発掘遺跡の期限前600年から紀元前50年に該当する異なる地層からも鉄の鍬が発見されたことが示される。鍬の形も複数の種類が発見されていることが示されている。

サンスクリット語で「鉄」を表す単語には、たとえばayasがある。そして、ayasの派生したāyasaという単語が「鉄で作られた物」を表す。それが武器や鎧を表す名詞とともに用いら

れることで、「鉄で作られた武器、鎧」を意味する。このような形で『マハーバーラタ』において物語内に鉄製の道具が登場する場合がある。その一例を示す以下の引用は、シカンディンの投じた武器をアシュヴァッターマンが防ぎ、鉄製の矢で反撃する場面。

tam āpatantaṃ sahasā kālānalasamaprabham,  
ciccheda samare drauṇir darśayan pāṇilāghavam,  
śikhaṇḍinaṃ ca vivyādha śarair bahubhir āyasaiḥ. (MBh.6.78.34)

交戦においてドローナの息子（＝アシュヴァッターマン）は、機敏な手を見せつつ、終末の炎に等しい輝きを持つ襲いかかって来るそれ（＝シカンディンが投げた剣）を直ちに切った。そして、多くの鉄製のśara群によってシカンディンを貫いた。

#### 4. nārācaの描写

nārācaに対して、どのような形容詞や比喩表現が使われているのかを示す。他の名前で表される矢に共通する表現も少なくない。

##### ・光、輝きを表す

nārācaについて、「輝き」を示す表現が見られる<sup>10</sup>。nārācaそのものや、撃たれた戦士が「輝いた」という動詞によって表現される場合もある。それとともにnārācaを太陽、太陽光線に例える表現も見られる<sup>11</sup>。また、後述する金の装飾や、神に関する物などとともに表されるものもある。矢の素材が葦であれば光を反射することは考えにくいだが、鉄であれば光を反射し、その光が周囲にいる戦士を照らすという状況は想定され得る。

以下は、ドローナがビーマに向かってnārācaを放つ場面。

lalāte 'tādayac cainaṃ nārācena smayann iva  
ūrdhvaraśmir ivādityo vibabhau tatra pāṇḍavaḥ. (MBh.7.102.78)

そして、笑っているかのような〔ドローナ〕は、彼（＝ビーマ）の額をnārācaによって撃った。そこでパーンダヴァは真っすぐの光線を持つ太陽のように輝いた。

以下はアルジュナがアシュヴァッターマンを攻撃する場面。

tato 'vidhyad bhruvor madhye nārācenārjuno bhṛśam,  
sa tena vibabhau drauṇir ūrdhvaraśmir yathā raviḥ. (MBh.8.12.50)

それからアルジュナは、nārācaによって両眉の真ん中を激しく貫いた。かのドローナの息子（＝アシュヴァッターマン）はそれによって、上に光線を〔放つ〕太陽のように輝

いた。

「輝く」に近い表現として、「燃える」と解釈し得る表現も見られる<sup>12</sup>。実際に火が点いて燃えているのか、輝きを示す表現なのかは定かではない。[Hopkins 1889: 277] は矢による傷の感触を表す比喩表現の可能性を示す。

sa visphārya mahac cāpam indrāśanisamasvanam,  
abhidudrāva vegena pāṇḍavānām mahārathān,  
visṛjan vimalāṃs tīkṣṇān nārācāñ jvalanaprabhān. (MBh.6.91.66)

彼（＝バガダッタ）は、インドラの稲妻のような轟音とともに大弓を引いて、汚れの無い、鋭く燃えるような輝きを持つnārāca群を放ちつつ、パーンダヴァたちの偉大な戦士たちに向かって急いで走った。

また、「炎のような」という表現も見られる<sup>13</sup>。

dīrghabāhur abhikruddhas tottrārdīta iva dvipaḥ,  
droṇaṃ pañcāśatāvidhyān nārācāir agniśaṃnibhaiḥ. (MBh.7.85.7)

突き棒に〔突かれた〕象のように、怒った逞しい腕の者（＝サーティヤキ）はドローナを50本の炎のようなnārāca群によって貫いた。

nārācaを松明に例えた表現が見られる<sup>14</sup>。以下はカルナがビーマにnārācaを撃つ場面。

taṃ karṇaḥ pañcaviṃśatyā nārācānām samārdayat,  
madotkaṭaṃ vane drptam ulkābhir iva kuñjaram. (MBh.8.34.35)

カルナは彼（＝ビーマ）を25本のnārāca群で撃った。森において発情した傲慢な象を松明で〔撃つ〕ように。

#### ・金が使われる

nārācaに金が使われる表現が見られる。金が武器として適切な素材であるのか、現実的な観点からは疑問であるが、物語における王族の権威を表す要素として解釈することは可能である。実用的な面を考えれば矢の表面を覆う装飾が主要な目的であると解釈するのが妥当であろう。

金が使われる矢の部分として矢羽が挙げられる<sup>15</sup>。[Hopkins 1889: 279] は金の矢羽をnārācaの主な特徴の1つとして挙げる。以下はカルナとビーマが互いに相手を攻撃する場面。

jātarūpariṣkārair dhanurbhiḥ sumahādhanaiḥ,  
suvarṇapuṅkhair iṣubhir nārācaiś ca sahasraśaḥ. (MBh.7.113.18)

金の飾りのついた非常に高価な弓によって、また、幾千の金の矢羽のついたiṣu群とnārāca群によって。

以下はナクラがサティヤセーナを攻撃する場面。

tataḥ saṃdhāya nārācaṃ rukmapuṅkhaṃ śilāśitam,  
dhanuś ciccheda rājendra satyasenasya pāṇḍavaḥ. (MBh.9.9.27)

それからパーンダヴァ (=ナクラ) は、石で砥がれ、金の矢羽のついたnārācaを向けて、サティヤセーナの弓を切り裂いた、王中の王 (=ドリタラーシュトラ) よ<sup>16</sup>。

矢の先端、即ち鏃が金であることを示す記述が見られる<sup>17</sup>。[Hopkins 1889: 279] は金あるいは銀の鏃がnārācaの主な特徴の1つであると述べる。以下はシカンディンがアシュヴァッターマンに対してnārācaを撃つ場面。

sa babhau naraśārdūlo lalāṭe saṃsthitais tribhiḥ,  
śikharaiḥ kāñcanamayair merus tribhir ivocchritaiḥ. (MBh.6.78.26)

その人中の虎 (=アシュヴァッターマン) は、そびえ立つ3つのメール山のような、額に刺さった先端が金で作られた3本 [のnārāca] によって輝いた。

以下はマツヤ国において仮の身分を装っていたアルジュナが、隠した武器を取りに行く場面。そこに同行したウッタラが、一つ一つの武器について誰の持ち物なのかを質問する。

ime ca kasya nārācāḥ sahasrā lomavāhinaḥ,  
samantāt kaladhautāgrā upāsaṃge hiraṇmaye. (MBh.4.38.25)

また、金で作られた箆の中にある、これらの羽のついた、すべて金 (または銀) の先端を持つ1000本のnārāca群は誰の物か。

また、矢の特定の部位を示さない形で、飾りとして金を用いる表現も見られる<sup>18</sup>。以下はそれぞれカルナとビーマの戦闘場面と、サーティヤキとアシュヴァッターマンの戦闘場面。

taṃ pratyavidhyad rādheyo jāmbūnadavibhūṣitaiḥ,

caturdaśabhir aty ugrair nārācair avicārayan. (MBh.7.109.28)

ラーデーヤ（＝カルナ）は躊躇うことなく、金の飾りで飾られた14本の非常に強力な nārāca群によって彼（＝ビーマ）を貫いた。

sātyakiḥ pañcaviṁśatyā drauṇim viddhvā śīlīmukhaiḥ,

punar vivyādha nārācaiḥ saptabhiḥ svarṇabhūṣitaiḥ. (MBh.8.39.11)

サーティヤキはドローナの息子（＝アシュヴァッターマン）を25本のśīlīmukha群によって貫いて、再び金で飾られた7本のnārāca群によって貫いた。

#### ・羽がついたもの

ハゲワシ、孔雀、アオサギの「羽がついた」という表現が見られる<sup>19</sup>。前述した金の矢羽と同時に出てくるところもある。以下はアルジュナがカウラヴァ軍を攻撃する場面。

vidārya dehān nārācair naravāraṇavājinām,

kaṅkabarhiṇāvāsobhir balaṃ vyadhamad arjunaḥ. (MBh.7.114.93)

アルジュナは、アオサギ、孔雀の羽がついたnārāca群によって、人、象、馬たちの体を撃って、軍隊を蹴散らした。

#### ・nārācaに対する加工

nārācaが鍛冶屋に磨かれたこと<sup>20</sup>や、石で砥がれた<sup>21</sup>ことを示す記述が見られる。以下はアビマニユがドゥフシャーサナの息子との戦闘でnārācaを放ち、アシュヴァッターマンに阻止される場面。

etāvad uktvā vacanaṃ karmāraparimārjitam,

nārācaṃ visasarjāsmāi taṃ drauṇis tribhir ācchinat. (MBh.7.47.12)

〔アビマニユは〕このように言葉を言って、鍛冶屋に磨かれたnārācaを彼（＝ドゥフシャーサナの息子）に放った。ドローナの息子（＝アシュヴァッターマン）はそれを3〔本の矢〕によって断ち切った。

以下はシャクニがビーマに対してnārācaを放つ場面。

śakunis tasya rājendra vāme pārśve stanāntare,

preṣayāmāsa nārācān rukmapuṅkhāñ śīlāśītān. (MBh.8.55.48)

王中の王（＝ドリタラーシュトラ）よ、シャクニは彼（＝ビーマ）の左側の胸の内部

に、金の矢羽のついた石で砥がれたnārāca群を飛ばした。

nārācaについて、「油で清められた」という表現が見られる<sup>22</sup>。油を使う理由は火を点けるため<sup>23</sup>、あるいは摩擦を減らし、貫きやすくするため<sup>24</sup>という説がある。また、油は槍に対しても使われることがある<sup>25</sup>。[Dube 2008: 29] は、J.L. Fitzgeraldの「早い再酸化に対してそれを防ぐために、矢の表面を磨き上げたところに油を薄く塗った」という説を引用するが、これを適切ではないと述べる。そうではなく、Dubeは「[[清める]、[洗い流す]を表す動詞“√dhāv”の過去分詞である] dhautaには、具体的な物質のみを対象とするのではなく、抽象的な概念に対しての『取り除く』という意味がある」と解説する<sup>26</sup>。そして、「油」を表すtailaとdhautaとの複合語tailadhautaを「油によって鉄の鏃の『柔らかさ』が除去された」、即ち鉄の鏃の堅さを強化するために油が使われたと解釈する。

[Dube 2008: 29-31] は冶金学の視点から、鉄の鏃の堅さを強化するためにどのような方法で油が使用されたのかを以下のように述べる。鉄の鏃を作る際に、熱した鉄の鏃を冷やす工程がある。その工程の時に、冷却のために水か塩水／焼灼剤溶液を使用する場合と、油を使用する場合がある。水か塩水／焼灼剤溶液を使用する場合は冷却率が高く、熱くなっていた鉄の鏃が急激に冷やされる。その結果、鉄の鏃の表面と芯との間の温度差が広がり、歪みや割れ目が生じる危険性が高くなる。一方、油を使用する場合は比較的冷却率が低く、温度の低下は緩やかになる。鉄の鏃の表面と芯との間の温度差はあまり広がらない。その結果、歪みや割れ目が生じる危険性を抑えられる。Dubeはこのような方法で鉄の鏃を強化するために油が使用されたと述べる。

歪みや割れ目がある鉄の鏃は殺傷力が低下し、使用前に刃こぼれが発生する危険性も高い。また、実用性の低下に加え、矢が人体に刺さった際、あるいは刺さった矢を引き抜く際に人体、鏃の双方に損傷が発生しやすく、鏃の破片が体内に残る危険性が増す。そのような観点から、鉄の鏃に歪みや割れ目を発生させないための作業は、武器の不正性、罪となる要素を取り除くという意味を持ち得た可能性もある<sup>27</sup>。

以下はクリシュナがアルジュナに対して戦場の様子を見るように言う場面。

jātarūpamayaiḥ puñkhaiḥ śārāṃś ca nataparvaṇaḥ,  
tailadhautāṃś ca nārācān nirmuktān iva pannagān. (MBh.8.14.29)

金で作られた矢羽のついた、真っ直ぐのśara群を、また、脱皮した蛇たちのような、油で清められたnārāca群を〔見よ〕。

上記引用部の前後第28偈から第34偈までは、戦場に散らばっている弓、箠、剣、槍など、矢以外の武器の様子も描写される。それらの多くも金で飾られており、価値の高さが表されて



いる。

・ 大きさ、形状

以下の場面は、マツヤ国におけるアルジュナに対するウッタラの質問。ここで出てくる nārāca が幅広く<sup>28</sup>、長く<sup>29</sup>、鉄で作られたことが分かる<sup>30</sup>。

kasyeme pṛthavo dīrghāḥ sarvapāraśavāḥ śārāḥ,  
śatāni sapta tiṣṭhanti nārācā rudhirāśanāḥ. (MBh.4.38.28)

これら、幅広く、長く、完全に鉄で作られた śara 群、700本ある血を吸う nārāca 群は誰の物か。

「曲がっていない」、即ち「真っすぐ」を表す語が見られる<sup>31</sup>。曲がりくねった矢は不正とされるため、その点ではここで使われる nārāca が公正なものであることが分かる。以下はサーティヤキとドローナの戦闘の場面。

nirmalānām ajihmānām nārācānām viśām pate,  
nirmuktāśīviṣābhānām saṃpāto 'bhūt sudāruṇaḥ. (MBh.7.73.18)

汚れない、曲がっていない、脱皮した毒蛇の輪郭を持つ nārāca 群の衝撃は非常に激しいものだった、人々の主 (= ドリタラーシュトラ) よ。

・ 価値の高さを表す

「汚れない」、「清められた」という表現が見られる<sup>32</sup>。その nārāca が物理的に清潔な状態であるのか、違反する要素がないという意味での清浄性を表すのかははっきりしない。以下はビーマがカウラヴァ軍を攻撃する場面。

bhīmaseno 'tha saṃkrudhas tava sainyaṃ durāsadam,  
nārācair vimalais tīkṣṇair diśaḥ prādrāvayad balī. (MBh.8.34.29)

そして、怒った力強いビーマセーナは、あなた (= ドリタラーシュトラ) の近付き難い軍隊を、汚れない、鋭い nārāca 群によって諸方に逃走させた。

nārāca に対して「最高の」、「最上の」という形容詞が見られる<sup>33</sup>。以下はカルナが敵の戦士たちを攻撃する場面。

tataḥ paramanārācair yudhāmanyūttamaujasau,

sātyakiṃ ca rathodāraṃ kampayāmāsa mārṅaṇaiḥ. (MBh.7.154.5)

それから、〔カルナは〕最高のnārāca群によってユダーマニユとウッタマウジャスを、また、mārṅaṇa群によって高貴な戦士サーティヤキを震えさせた。

以下はアシュヴァッターマンがアルジュナとクリシュナを攻撃する場面。

saṃdhāya nārācavarān daśāśu drauṇis tvarann ekam ivotsasarja,

teṣāṃ ca pañcārjunam abhyavidhyan pañcācyutaṃ nirbibhiduḥ sumuktāḥ. (MBh.8.12.65)

ドローナの息子（＝アシュヴァッターマン）は速やかに、最上のnārāca群を一束にして、1本のように放った。そして、見事に放たれたそれらのうち5本はアルジュナを貫き、5本はアチュタ（＝クリシュナ）を切り裂いた。

他の価値の高い品々とともに並列されることによって、その場面で出てくるnārācaの価値の高さが表されることもある。以下はユディシュティラのラージャスーヤ（帝王即位式）において、各地の王がユディシュティラに貢物を贈る様子を、ドゥルヨーダナが回想する場面。そこでnārācaは高価な宝石や布製品などとともに並列される<sup>34</sup>。

vicitrāṃś ca paristomān ratnāni ca sahasraśaḥ,

nārācān ardhanārācāñ śastrāṇi vividhāni ca. (MBh.2.47.30)

また、種々の掛け布団、幾千の宝石、nārāca群、ardhanārāca群、また、様々な武器を〔贈った〕。

該当の章のほとんどが高価な品々の羅列であり、次の章まで続く。中には馬、象、剣などの軍用品も出てくるが、矢に関しては他に確認できなかった。

以下は、戦争でカウラヴァ軍の指揮官に任命されたカルナが、最高の状態でアルジュナと対戦するため、武芸に秀でると見込んだシャリヤに自分の戦車の御者になってもらおうとする場面。カルナは、最高の御者であるシャリヤ、最高の馬、主要な戦車などと並列する形で自分の戦車にnārācaを運ぶように主張する<sup>35</sup>。

tasya me sārathiḥ śalyo bhavatu asukaraḥ paraiḥ,

nārācān gārdhrapatrāṃś ca śakaṭāni vahantu me. (MBh.8.22.51)

敵たちにとって手強い者であるシャリヤは、この私の御者になるべきである。また、私の戦車群にハゲワシの羽で飾られたnārāca群を運ぶべきである。

以下では、ドローナの強さを表現する際に、彼の持つ武器としてnārācaが用いられる<sup>36</sup>。

sampradrutaḥ krodhaviṣo vyāditāsyāsarāsanah,

tīkṣṇadhāreṣudaśanaḥ śitanārācamaṣṭravān. (MBh.7.73.3)

怒りという毒、口を開けたような弓、鋭い刃のiṣuという歯、砥がれたnārācaという牙を持つ者（＝ドローナ）は走った。

#### ・矢の強さを表す

「鋭い」を意味する形容詞tīkṣṇa<sup>37</sup>とniśita<sup>38</sup>は、「鉄」を意味する名詞としても用いられる単語である。一方、tejana<sup>39</sup>も「鋭い」を意味する形容詞であるが、「葦」、「竹」を意味する名詞としても用いられる。nārāca に対してtejana が使われる用例は、tīkṣṇa, niśitaに比べると少ない。[Hopkins 1889: 279] は「鋭さ」をnārācaの特徴の1つとして挙げる。以下はそれぞれドゥルヨーダナとビーマの戦闘場面と、ビーマとケートゥマットの戦闘場面。

tato duryodhano rājā bhīmasenaṃ mahābalaṃ,

nārācena sutīkṣṇena bhṛṣaṃ marmaṇy atāḍayat. (MBh.6.74.5)

それからドゥルヨーダナ王は、怪力のビーマセーナの急所を、鋭いnārācaによって激しく撃った。

tataḥ punar ameyātmā nārācair niśitais tribhiḥ,

ketumantaṃ raṇe bhīmo 'gamayad yamasādanam. (MBh.6.50.70)

それから再び、強固な精神力をもつビーマは、合戦においてケートゥマットを3本の鋭いnārāca群によってYamaの住居に行かせた。

「鋭い」より抽象的な表現だが、「非常に強力な」「恐ろしい」という形容詞が見られる<sup>40</sup>。以下はビーマがカルナを攻撃する場面。

tasmiṃs tu vivare rājan nārācān gārdhravāsasaḥ,

prāhiṇot sūtaputrāya bhīmasenaś caturdaśa. (MBh.7.109.24)

王（＝ドリタラーシュトラ）よ、一方、その合間に、ビーマセーナは14本のハゲワシの羽のついたnārāca群を御者の息子（＝カルナ）の方に射た。

te tasya kavacaṃ bhittvā svarṇapuñkhā mahaujasah,

hemacitrā mahārāja dyotayanto diśo daśa. (MBh.7.109.25)

それら金の羽飾りのついた金の輝きを持つ非常に強力な〔nārāca群〕は、彼（＝カルナ）

の鎧を裂いて、十方を輝かせた。

「急所を断つ (marmabhedin)」という語が見られる<sup>41</sup>。marmabhedinは、MWにおいては矢を意味する名詞として示されるが、文脈上はmarman (急所) とbhedin (断つもの) の複合語で、nārācaに対する形容になっている。

sa nirbhinno raṇe bhīmo nārācair marmabhedibhiḥ,  
susrāva rudhiraṃ bhūri parvataḥ salilaṃ yathā. (MBh.7.109.30)

戦闘において急所を断つnārāca群によって切り裂かれたかのビーマは、山が水を流すようにおびただしい血を流した。

「鎧を貫く」<sup>42</sup>、「敵の体を裂く」<sup>43</sup>、「敵を殺す」<sup>44</sup>、「生命を食う」<sup>45</sup>、「血を飲む」<sup>46</sup>といったnārācaの威力、殺傷力を強調する表現が見られる。以下はそれぞれカルナとビーマの戦闘、カルナとチェーディ軍の戦闘、クリシュナとアルジュナの会話、ドローナとアルジュナの戦闘、クリパとアルジュナの戦闘。

tasya karṇo dhanurmadhye dvidhā ciccheda patriṇā,  
atha taṃ chinnadhanvānam abhyavidhyat stanāntare,  
nārācena sutīkṣṇena sarvāvaraṇabhedinā. (MBh.8.34.33)

カルナは、彼 (= ビーマ) の弓の真ん中を2つに裂いた。そして、切られた弓を持つ彼の胸の内部を、非常に鋭いすべての鎧を貫くnārācaによって貫いた。

suvarṇapuṅkhair nārācaih parakāyavidāraṇaiḥ,  
cedikān avadhīd vīraḥ śataśo 'tha sahasraśaḥ. (MBh.8.32.34)

そして、勇士 (= カルナ) は、金の矢羽のついた敵の体を裂くnārāca群によって、幾百、幾千のチェーディの者たちを殺した。

suvarṇapuṅkhā nārācāḥ śatruḥnā vaidyutaprabhāḥ,  
tvayāstās tasya marmāni bhittvā pāsyanti śoṇitam. (MBh.8.51.84)

お前 (= アルジュナ) によって放たれる、金の矢羽のついた、敵を殺す、雷の輝きを持つnārāca群は、彼 (= カルナ) の急所を裂いて、血を飲むだろう。

athātyartha viṣṣṭena dviṣatām asubhojinā,  
ājaghne vakṣasi droṇo nārācena dhanamjayam. (MBh.7.66.22)

それからドローナは、敵たちの生命を食う、放たれたnārācaによって、ダナンジャヤ（=アルジュナ）の胸部を激しく撃った。

tān aprāptāñ śítair bāñair nārācān raktabhojanān,  
kṛpās ciccheda pārthasya śataśo 'tha sahasraśaḥ. (MBh.4.52.4)

クリパは、パールタ（=アルジュナ）の数百、さらに数千のそれら到達していない血を飲むnārāca群を、bāṇa群によって裂いた。

放たれたnārācaが「地面に入る」という表現が見られる<sup>47</sup>。この表現から、矢を地面と平行に放つのではなく、ある程度上方に角度をつけて、放物線を描くように矢を飛ばす場合があると想定されていたことが分かる。矢を上方に放つ点は、相手に向かう矢を雨が降る様子に例える表現からも推察される。また、nārācaが相手の戦士の防具や身体に命中した後に、地面に入る場合もあることから、矢にそれなりの重量や強度が具わっていることが想定されていたことが分かる。以下はガトートカチャがブーリシュラヴァスを攻撃する場面。

tataḥ punar ameyātmā nārācān daśa pañca ca,  
bhūriśravasi saṃkruddhaḥ prāhiṇod bharatarṣabha,  
te varma bhittvā tasyāśu prāviśan medinī talam. (MBh.6.88.33)

それから再び強靱な心を持つ者（=ガトートカチャ）は怒って、15本のnārācaをブーリシュラヴァスに撃った、バラタの雄牛よ。それらは彼の鎧を裂いて、速やかに地面に入った。

以下はドリシュタデユムナとドゥルヨーダナの戦闘場面。

sa pañcadaśa nārācāñ śvasataḥ pannagān iva,  
jighāmsur bharataśreṣṭhaṃ dhṛṣṭadyumno vyavāsṛjat. (MBh.8.40.27)

バラタの最上者（=ドゥルヨーダナ）を殺そうと望むかのドリシュタデユムナは、息を吐いている蛇のような15本のnārāca群を放った。

te varma hemavikṛtaṃ bhittvā rājñāḥ śilāśitāḥ,  
viviśur vasudhāṃ vegāt kaṅkabarhiṇavāsasaḥ. (MBh.8.40.28)

アオサギと孔雀の羽がついた石で砥がれたそれらは、王の金で作られた鎧を裂いて、速やかに地面に入った。

・ 神に関する物に例える

nārācaを、死をもたらす死神（Kāla<sup>48</sup>, Yama<sup>49</sup>, Mr̥tyu<sup>50</sup>）や、死神が持つ杖（daṇḍa）に例える表現が見られる。神に関する物になぞらえることで、nārācaの強さ、価値が示される。以下は、ビーシュマとユディシュティラの戦闘場面。

taṃ tu chittvā raṇe bhīṣmo nārācaṃ kālasammitam,

nijaghne kauravendrasya hayān kāñcanabhūṣaṇān. (MBh.6.82.11)

合戦においてビーシュマは、Kālaに等しいそのnārācaを裂く一方で、カウラヴァの王（=ユディシュティラ）の、金で飾られた馬たちを殺した。

以下は、ナクラがアングの王子を攻撃する場面。

sahadevaṃ tu nakulo vārayitvāṅgam ārdayat,

nārācair yamadaṇḍābhais tribhir nāgaṃ śatena ca. (MBh.8.17.15)

しかし、ナクラはサハデーヴァを制して、アングの王子をYamaの杖のような3本のnārāca群によって、また100本で象を悩ませた。

nārācaは、インドラ神が用いる武器のvajra、即ち稲妻にも例えられる。また、他の稲妻を表す単語が使われる場合もある。また同時に、インドラ神を表す単語が用いられる例も見られる<sup>51</sup>。以下は、クリシュナがアルジュナに、ビーマが戦っている様子を話す場面。

paśya bhīmena nārācais chinnā nāgāḥ patanty amī,

vajrivajrāhatānīva śikharāṇi mahībhṛtām. (MBh.8.43.67)

vajraを持つ者（=インドラ）の稲妻によって撃たれた山々の頂のように、ビーマのnārāca群によって切り裂かれた、あの倒れていく象たちを見よ。

以下のアルジュナとカルナの戦闘場面では、飛んでいくnārācaをGaruḍaに例える<sup>52</sup>。

sa garutmān ivākāśe prārthayan bhujagottamam,

nārāco 'bhyapatat karṇaṃ tūrṇaṃ gāṇḍīvacoditaḥ. (MBh.7.114.87)

そのガンディーヴァ弓によって放たれたnārācaは、空中で最上の蛇を求めたgarutmat（=Garuḍa）の如く、速やかにカルナを襲った。

## ・動物に例える

nārācaを動物に例える用例がある。その中でも蛇に例える表現が特に多く見られる。例えられた蛇に対しても、「脱皮した」、「怒った」、「息を吐いている」、「口を開いた」、「毒蛇のような」、「蛇が蟻塚に入るように」など、多様な表現が用いられる<sup>53</sup>。[Hopkins 1889: 278]は蛇の表現について、「毒が塗られた」、「鋭い刺し傷」、「矢の飛ぶ音」などを意味する比喩表現である可能性を提起する。蛇の例えを「毒が塗られた表現」とする説について [Singh 1965: 106]は、その矢で撃たれた者に対して毒の効果に関する描写がないことや、liptaなどの「毒が塗られた」という意味を示す単語が同時に使われていないことから否定的である。以下は、サーティヤキが降り注ぐ敵の武器をnārācaによって阻止する場面。

tām āsmavṛṣṭim tumulām pārvatīyaiḥ samīritām,  
bibhedoragasamkāsair nārācaiḥ śinipuṅgavaḥ. (MBh.7.97.35)

それらの山の部族たちによって発射された凄まじい石の雨を、シニの雄牛（＝サーティヤキ）は蛇の姿をしたnārāca群によって割った。

以下の場面では、額に刺さったnārācaを犀の角に例える<sup>54</sup>。前の偈で放たれたnārācaが、次の偈でbāṇaに言い換えられている。このような言い換えは珍しくはない。

śaraiḥ śarāṃs tato drauṇiḥ saṃvārya yudhi pāṇḍavam,  
lalāṭe 'bhyahanad rājan nārācena smayann iva. (MBh.8.11.5)

それから、笑っているかのようなドローナの息子（＝アシュヴァッターマン）は、戦闘においてśara群をśara群によって防いで、パーンダヴァ（＝ビーマ）の額をnārācaによって撃った。

lalāṭasthaṃ tato bāṇaṃ dhārayāmāsa pāṇḍavaḥ,  
yathā śrīgam vane drptaḥ khaḍgo dhārayate nrpa. (MBh.8.11.6)

それからパーンダヴァ（＝ビーマ）は、森における傲慢な犀が角を保つように、額で立つbāṇaを保持していた、王（＝ドリタラーシュトラ）よ。

地面に入るnārācaの様子を、巣に入る動物に例える<sup>55</sup>。以下はアシュヴァッターマンとサーティヤキの戦闘場面。

pratilabhya tataḥ saṃjñāṃ droṇaputraḥ pratāpavān,  
vārṣṇeyaṃ samare kruddho nārācena samardayat. (MBh.6. 97.46)

それから光輝あるドローナの息子（＝アシュヴァッターマン）は意識を取り戻して怒

り、交戦においてヴリシュニの者（＝サーティヤキ）をnārācaによって傷つけた。

śaineyaṃ sa tu nirbhidyā prāviśad dharanītaḥ,

vasantakāle balavān bilaṃ sarvaśiśur yathā, (MBh.6. 97.47)

そして、それはシニの子孫（＝サーティヤキ）を傷つけて、大地の表面に入った。春の季節に巣に〔入る〕力強いすべての若い動物の如く。

また、地面に入るnārācaの様子を、鳥が山に入る様子に例える<sup>56</sup>。以下は、カルナとビーマの戦闘場面。ここでは前の偈で放たれたnārācaが、次の偈でpatrinに言い換えられている。patrinは「羽を持つもの」という形容詞であるとともに、「矢」、「鳥」を表す名詞でもある。

taṃ pratyavidhyad rādheyo jāmbūnadavibhūṣitaiḥ,

caturdaśabhir aty ugrair nārācair avicārayan, (MBh.7.109.28)

ラーデーヤ（＝カルナ）は躊躇うことなく、金の飾りで飾られた14本の非常に強力なnārāca群によって彼（＝ビーマ）を貫いた。

te bhīmasenasya bhujāṃ savyaṃ nirbhidyā patriṇaḥ,

prāviśan medinīm bhīmāḥ krauñcaṃ patrārathā iva, (MBh.7.109.29)

それらの恐ろしいpatrin群はビーマセーナの左腕を切り裂いて地面に入った。鳥たちがクラウンチャ山に入るように。

#### ・山に例える

体に刺さったnārācaを山の頂に例える表現が見られる<sup>57</sup>。以下はビーマがアシュヴァッターマンを撃った場面。ここでも前の偈に出たnārācaが、次の偈でbāṇaに言い換えられている。

tato drauṇim raṇe bhīmo yatamānaṃ parākramī,

tribhir vivyādha nārācair lalāṭe vismayann iva, (MBh.8.11.7)

それから合戦において、勇気を示しているビーマは笑っているかのように、努力しているドローナ息子（＝アシュヴァッターマン）の額を3本のnārāca群で貫いた。

lalāṭasthais tato bāṇair brāhmaṇaḥ sa vyarocata,

prāvṛṣīva yathā siktas trīśṛṅgaḥ parvatottamaḥ, (MBh.8.11.8)

それから、そのバラモン（＝アシュヴァッターマン）は額に立つbāṇa群によって輝いた。雨期に3つの頂を持つ濡れた最高の山のようにであった。

#### ・花に例える

体に刺さったnārācaを、花（薔薇<sup>58</sup>、青蓮華で作られた花輪<sup>59</sup>）に例える表現が見られる。



以下は、ビーマがカルナに *nārāca* を撃ち、刺さった様子を表している。

*lalāstathais tu tair bāṇaiḥ sūtaputro vyarocata,  
nīlotpalamayīm mālām dhārayan sa purā yathā.* (MBh.7.114.8)

一方、それらの額にある *bāṇa* 群によって御者の息子（＝カルナ）は輝いた。彼は、以前から青蓮華で作られた花輪を保っていたかのようなだった。

・数の多さを表す例え

放たれた多数の *nārāca* を雨に例える表現が見られる。それに合わせて、矢を放つ戦士を雨雲に例える場合もある<sup>60</sup>。以下は、ビーマと複数の戦士たちとの戦闘場面。

*sa tudyamāno nārācair vṛṣṭivegair ivarṣabhaḥ,  
jaghāna pañcabhir bāṇaiḥ pañcaivātibalo rathān,  
tān dṛṣṭvā nihatān vīrān vicelur nrpasattamāḥ.* (MBh.7.132.21)

彼（＝ビーマ）は、雄牛が猛烈な雨に撃たれるかのように、*nārāca* 群によって撃たれつつ、まさに5人の非常に力強い戦士たちを5本の *bāṇa* 群によって撃った。最高の王たちは殺された勇士たちを見て、動揺した。

倒れているビーシュマに突き刺さっている多数の矢を藪に例える表現が見られる<sup>61</sup>。

*karṇinālīkanārācair āstīrya śayanottamam,  
āviśya śete bhagavān skandaḥ śaravaṇam yathā.* (MBh.11.23.18)

尊者（＝ビーシュマ）は、*karṇinālīkanārāca* 群によって覆われて、Skandaが葦の藪に入るように、最高の寢床に入って眠る。

また、比喩表現を用いずに、単に「群れ (*gaṇa*)」という単語を付け加えた個所も存在する<sup>62</sup>。以下は、アシュヴァッターマンと複数の戦士たちとの戦闘場面。

*punar apy atisaṃkruddhaḥ savṛkodarapārṣatān,  
sa nārācagaṇaiḥ pārthān drauṇir vidhvā mahābalaḥ.* (MBh.7.131.125)

さらに、再び非常に怒った強力なかのドローナの息子（＝アシュヴァッターマン）は、ヴリコーダラ（＝ビーマ）とパールシャタ（＝ドリシュタデュムナ）とパールタ（＝アルジュナ）たちを、*nārāca* 群によって貫いて、

### ・違反とされる矢karṇinとの複合語

先に、逆刺を持つ矢karṇinが不正な武器であることを述べたが、しばしば使われる場面がある<sup>63</sup>。karṇinが出てくる場合、その半数近くがnārācaとの複合語になっている。またさらに、nālīkaという名前の矢も同時に使われ、karṇinālīkanārācaという複合語になる場合が多い。以下は、ビーシュマがパーンダヴァ軍に対して攻撃する場面。

suvarṇapuṅkhair iṣubhir gārdhrapakṣaiḥ sutejanaiḥ,  
karṇinālīkanārācais chādayāmāsa tad balam. (MBh.6.102.11)

金の矢羽のついた、ハゲワシの羽で飾られた、非常に鋭いiṣu群、karṇinālīkanārāca群によってその（＝パーンダヴァの）軍勢を覆った。

以下はmlecchaたちが様々な武器でアルジュナを攻撃する場面。

karṇinālīkanārācais tomaraiḥ prāśaktibhiḥ,  
kampanair bhiṅḍipālāis ca rathasthaṃ pārtham ārdayan. (MBh.8.59.11)

〔mleccha（＝野蛮人）たちは〕karṇinālīkanārāca群、tomara群、prāśakti群、kampana群、bhiṅḍipāla群によって、戦車に乗るパールタ（＝アルジュナ）を撃った。

### おわりに

以上、『マハーバーラタ』における、nārācaに関する用例を示した。nārācaに対して用いられる表現には、主に姿形を表すものと、強さを強調するものが多い。

金の鎌や金の羽、鳥の羽がついた、石で砥がれたなどの記述は、nārācaの具体的な姿形、状態に関して直接的な理解に繋がる要素である。また、真っ直ぐという記述はnārācaの形状とともに、不正な要素を否定していることが分かる。鋭い、急所を断つ、鎧を貫く、生命を食うなどの記述は、nārācaの強さを直接的に表す。

山の頂や花、雨などを用いる比喩表現は、nārācaの見栄えを強調する。蛇やvajraや死神のdaṇḍaなどを用いる比喩表現は、nārācaの強さを強調する要素であるとも、見た目を表す要素であるとも、両方の可能性が考えられる。

輝く、鍛冶屋に磨かれる、石で砥がれる、tīkṣṇaなどの語が用いられている部分は、その部分に出てくるnārācaが作者によって鉄であると想定されていることを推測し得る。

今後、nārācaの特徴をさらに明らかにするためには、他の種類の矢の情報を精査し、それらと比較していく必要がある。また、『マハーバーラタ』と、他の文献におけるnārācaの扱いについて比較を進める必要がある<sup>64</sup>。その過程で、「清められた」という表現の具体的な意味や、他の種類の矢と高価値の品とを並列する記述が存在するのか、nārācaとkarṇinの関係

など、疑問点を明らかにしていきたい。

<sup>1</sup> [Hopkins 1889: 281], [Singh 1965: 103].

<sup>2</sup> [Hopkins 1889: 275], [Singh 1965: 104], [Brockington 1998: 180].

<sup>3</sup> [上村 1984b: 169].

<sup>4</sup> ardhacandra は「半月」と読めるが、crescent head, またはcrescent shapedと解釈する [Hopkins 1889: 278], [Singh 1965: 104] の解説、Ganguliの翻訳に従う。

<sup>5</sup> マヌ法典7.91にも同様の意味の記述がある。毒、逆刺に加え、仕込みの武器、火のついた矢が禁止であると述べられる。na kūtair āyudhair hanyād yudhyamāno raṇe ripūn na karṇibhir nāpi digdhair nāgnijvalitatejanaiḥ.

<sup>6</sup> MBh.7.164.12a-d.

<sup>7</sup> MBh.7.164.13a-b.

<sup>8</sup> [Hopkins 1889: 275], [Singh 1965: 105], [Brockington 1998: 180], [Dube 2008: 27-28].

<sup>9</sup> ただし [Mayrhofer 1963: 154] では、鉄の矢に疑問符を付ける。nārācaの語源はnāḍa, nāla, 即ち「葦で作られたもの」ではないかとの説もあるが、定かではない。

<sup>10</sup> 6.91.66f, 6.107.43c-44b, 7.24.39b-c, 7.102.78b-d, 7.106.52c-53d, 7.109.24b-27b, 7.109.30a, 7.114.6b-8b, 8.11.7c-8b, 8.12.50b-c, 8.36.15a-b, 8.40.27a-29b, 8.42.50b-f, 8.43.71c-d, 8.51.84a-b, 9.13.38e-f, 9.23.62a-b, 14.75.17c-19a, 14.78.26c-27b.

<sup>11</sup> 3.40.33b-d, 7.25.12c, 7.37.21d-22c, 7.102.78b-d, 7.106.52c-53d, 7.109.30a-d, 8.9.3c, 8.12.44b, 8.12.50b-d, 8.51.84a-b, 9.19.13b-d.

<sup>12</sup> 6.91.66f, 9.12.20a-b, 9.19.13c-d.

<sup>13</sup> 7.85.7d, 8.43.71c-d, 9.23.62a-b, 14.75.17c.

<sup>14</sup> 8.34.35b-d, 11.18.25c-d.

<sup>15</sup> 6.102.11a-c, 6.107.43c-d, 7.37. 21b-22c, 7.109.24b-25b, 7.113.18c-d, 8.32.34a, 8.51.84a, 8.55.48c-d, 9.9.27a-b.

<sup>16</sup> nārācaに対してrukmapunkha (金の矢羽のついた) の単語が使われる場合、後述する śilāsita (石で砥がれた) が常に同時に使われている。

<sup>17</sup> 4.38.25a-c, 6.78.25d-26c.

<sup>18</sup> 7.109.28b-d, 8.39.11c-d, 9.12.20a-22b.

<sup>19</sup> 4.38.25b, 6.102.11b-c, 7.28.37d-38c, 7.109.24d, 7.114.93a-c, 8.15.21b, 8.22.51c, 8.22.60a, 8.40.27a-28d, 8.65.33b-c, 8.66.26c-27d.

<sup>20</sup> 7.47.12b-c, 8.9.3c-d, 9.19.13c-d.

<sup>21</sup> 3.46.6a-b, 7.37.21b-22c, 7.73.3d, 7.97.40c-41b, 8.40.27a-28b, 8.55.48c-d, 9.9.27a-b, 9.19.14a-b.

- <sup>22</sup> 8.14.29c, 8.65.33b-c, 9.27.28b.
- <sup>23</sup> [Hopkins 1889: 277].
- <sup>24</sup> [Singh 1965: 105].
- <sup>25</sup> [Singh 1965: 107].
- <sup>26</sup> [Dube 2008: 28-29].
- <sup>27</sup> [Dube 2008: 30-31] は、鏝が対象に当たった後に曲がってはならないという点を指摘しているが、その重要性は低いと述べる。
- <sup>28</sup> 4.38.28a-d.
- <sup>29</sup> 4.38.28a-d.
- <sup>30</sup> 4.38.28b-d.
- <sup>31</sup> 7.73.18a-b.
- <sup>32</sup> 6.91.66e-f, 7.73.18a-b, 7.162.41a-d, 8.34.29c, 8.58.5b, 9.24.26c.
- <sup>33</sup> 7.154.5a, 7.162.41a-d, 8.12.65a, 8.57.58d.
- <sup>34</sup> 2.47.30c.
- <sup>35</sup> 8.22.51c.
- <sup>36</sup> 7.73.3d, 7.73.6d.
- <sup>37</sup> 3.46.6b-c, 6.43.44a, 6.55.30c, 6.74.5c, 6.91.66e-f, 6.107.43c, 8.10.3b, 8.15.21a-b, 8.34.29c, 8.34.33e, 8.35.15c, 8.43.71c-d, 8.44.35c, 8.65.33a-c, 9.23.62a-b, 9.24.26c, 9.25.13a-b, 11.18.25c.
- <sup>38</sup> 6.50.70b, 6.83.27a, 7.153.22c, 8.33.23c-d, 9.19.13c-d.
- <sup>39</sup> 6.102.11b-c, 7.53.40b.
- <sup>40</sup> 7.109.24b-25b, 7.109.28c-d.
- <sup>41</sup> 3.40.33b, 4.52.3d, 7.15.7d, 7.106.33d, 7.109.31b.
- <sup>42</sup> 8.34.33e-f.
- <sup>43</sup> 8.32.34a-b.
- <sup>44</sup> 8.51.84a-b.
- <sup>45</sup> 7.66.22b-d.
- <sup>46</sup> 4.52.3d-4b.
- <sup>47</sup> 6.88.33b-f, 6.97.46d-47b, 7.101.15b-d, 7.109.24b-27c, 7.109.28d-30b, 8.40.27a-28c, 8.66.26c-27d, 9.13.38e-39d.
- <sup>48</sup> 6.82.11b, 8.42.50b-d.
- <sup>49</sup> 7.114.6b-d, 8.17.15c-d, 9.13.38e-f.
- <sup>50</sup> 7.114.86c-d.
- <sup>51</sup> 7.25.15d-16d, 7.28.37d-38b, 7.73.6d, 7.141.22b-23b, 8.19.61a-d, 8.43.67a-d, 9.13.38e-39c, 9.13.40b-d, 14.75.17c-19d, 14.78.26c-27b.

- <sup>52</sup> 7.114.87a-c.
- <sup>53</sup> 6.42.17c-d, 6.82.9c-d, 6.83.27a-d, 6.88.3b-e, 7.28.37d-38d, 7.73.15a-c, 7.73.18b-c, 7.97.35c-d, 7.98.15a-b, 7.109.24b-27d, 7.114.6b-7d, 7.130.22c-d, 8.14.29c-d, 8.40.27a-b, 8.65.33a-c, 8.66.26c-d, 9.12.20a-b.
- <sup>54</sup> 8.11.5d-6d.
- <sup>55</sup> 6.97.46d-47d.
- <sup>56</sup> 7.109.28d-29d.
- <sup>57</sup> 8.11.7c-8d.
- <sup>58</sup> 7.24.39b-d.
- <sup>59</sup> 7.114.6b-8d.
- <sup>60</sup> 7.132.21a-b, 7.150.96a-b, 8.17.4a-b.
- <sup>61</sup> 11.23.18a-d.
- <sup>62</sup> 7.131.125c, 9.23.62a.
- <sup>63</sup> 3.46.6a, 3.295.13a, 3.296.29a, 5.34.76a, 5.139.38a, 6.102.11c, 7.145.35a, 7.154.14a, 8.59.11a, 11.19.6a, 11.23.18a.
- <sup>64</sup> 現在『ラーマヤナ』におけるnārācaについて調査中である。『マハーバーラタ』と比べると『ラーマヤナ』に出てくるnārācaの用例は少ないが、『マハーバーラタ』でnārācaとともに多く使われている動詞、形容詞、比喩表現などと同じ表現が使われている場合が多い。『ラーマヤナ』独自の用法として、空中を飛んで移動するハヌマトの様子を「弦から放たれたnārācaのよう」と例えるものが見られる。

### [文献一覧]

- Brockington, John., 1998, *The Sanskrit Epics*, Leiden / Boston / Köln: Brill.
- Dube. R. K., 2008, Ferrous arrowheads and their oil quench hardening: Some early Indian evidence, *JOM*, pp 25-31.
- Fitzgerald, James L., 2004, *The Mahābhārata The book of the women ; The book of peace, part one*, Chicago.
- Ganguli, Kisari Mohan., 1972-1976, *The Mahabharata of Krishna-Dwaipayana Vyasa*, 12vols, New Delhi.
- Hopkins, E. W., 1889, Social and military position of the ruling caste in ancient india as represented by the Sanskrit epic, *JAOS*, 13, pp. 57-329.
- Kane P. V., 1973, *History of dharmasāstra*, vol.3, Poona.
- Kinjawadekar P. R. eds. 1929, *The Mahābhāratam, with The Bharata Bhawadeepa commentary of Nīlakaṇṭha*, Poona.
- Mayrhofer, M., 1956-1980, *Kurzgefaßtes etymologisches Wörterbuch des Altindischen*, Heidelberg.
- Singh, S. D., 1965, *Ancient Indian Warfare with Special Reference to The Vedic Period*, Leiden.
- Sörensen, S. et al., 1963, *An index to the names in the Mahābhārata, with short explanations and a*

*concordance to the Bombay and Calcutta editions and P. C. Roy's translation, Delhi.*

Sukthankar, V. S. et al., 1933-1966, *The Mahābhārata for the First Time Critically Edited*, 19vols, Pune.

上杉彰紀、2004、「南アジアにおける鉄器 —北インドを中心に—」、『西アジア考古学』第5号、日本西アジア考古学会、37-52頁

片山一良訳、1999、『パーリ仏典〈第1期〉3 中部（マッジマニカーヤ）中分五十経篇 I』、大蔵出版

上村勝彦訳、1984a、『カウティリヤ実利論（上）』、岩波書店

上村勝彦訳、1984b、『カウティリヤ実利論（下）』、岩波書店

上村勝彦訳、2002-2005、『原典訳 マハーバーラタ（全8巻）』、ちくま学芸文庫

菅沼晃、1985、『インド神話伝説辞典』、東京堂出版

中村元、早島鏡正訳、1963-1964、『ミリンダ王の問い（全3巻）』、東洋文庫

中村了昭訳、2012-2013、『ラーマーヤナ（全7巻）』、東洋文庫

橋本泰元、宮本久義、山下博司、2005、『ヒンドゥー教の事典』、東京堂出版

原実、1968、「KṢĀTRA-DHARMA — 古代インドの武士道 —」（上）、『東洋学報』第51巻、271-304頁

原実、1968、「KṢĀTRA-DHARMA — 古代インドの武士道 —」（下）、『東洋学報』第51巻、420-456頁

山崎元一、1994、『古代インドの王権と宗教 — 王とバラモン —』、刀水書房

渡瀬信之訳、1991、『サンスクリット原典全訳 マヌ法典』、中公文庫

**Arrow in *Mahābhārata***  
**— About *nārāca* (“arrow of iron”) —**

ITO, Yorito

Weapons described in the *Mahabharata* war are sword, spear, club, axe, and supernatural weapons of fantastic image, etc. However, bows and arrows are so often referred. Instead arrows have various kind of name, we don't know they are different or same definitely.

In this paper I focus on a kind of arrow named *nārāca*. In the *Mahabharata* arrows are mostly *śara* or *bāṇa*. These two words mean “reed” too and some scholars think that these arrows are made of reed. Some arrows in Sanskrit may have shape characteristic and we can distinguish them in form.

Some dictionaries teach us that *nārāca* is an iron arrow. And I will argue following questions. Who use it? To whom it is used? Which kind of words; verbs, nouns and adjectives, are used with it?